



令和五年度九十九里郷土研究会

会員一覽(令和五年十二月一日現在・敬称略)

名誉顧問 木島里八

顧問 川島秀臣・内山いつ

会長 齊藤功

副会長兼事務局長 加藤隆雄

会計 古河達也・伊東邦子

会計監査 河野時巧・浅岡弘美

書記 谷川良枝・藤代智子

運営委員 安達和夫・内山菊敏・内山隆・

小澤君代・鍵田貴俊

会員 秋原芳枝・大矢吉明・小川正子・

加藤八重子・川嶋俊江・木村一夫・

子安愛子・齋藤英子・作田光代・櫻井憲子・

鈴木喜美子・鈴木陽子・染谷佳子・

高橋世志美・谷川和子・当間君子・

鶴岡静子・富田勲・中村あをい・中村幸子・

中村亮子・古川公美甲・古川長子・

三宅伯彦・村松英一・望月せい子・

望月秀夫・望月操・山口勇子

第 14 号

会長 齊藤 功
事務局長 加藤隆雄
郷土研通信編集 安達和夫
(連絡先)
090-8000-0695

会員数 44 名
(令和 5 年 12 月 1 日現在)
平成 22 年 4 月 17 日創立

ソバ栽培と花粉 会員 内山隆

はじめに

本年の町民文化祭で会員の鈴木陽子さんが、ソバの花を用意されていました。翌日、幸運にも鈴木さんが準備されていたソバは、十分に水上げされ、花が新鮮な状態で復活されていました。これならば、細部まで観察できます。

今年は福島の檜枝岐村に行く機会があったのですが、花を十分に観察できずにいました。ソバの花は、めしべとおしべの長さが異なる二形があるのですが、おしべの長い典型的な花の写真が不足していました。右の写真です。



左の写真は、5月に檜枝岐村で観察したものです。赤い薬をつけたおしべの長さに違いがあります。

1 ソバ属花粉化石の検出記録

手元の 10 編の論文の中でも最古の記録は、岩手県花泉層の「(ソバに) 酷似した花粉」です。著者(島倉巳三郎氏)は、「花泉層の花粉がソバであれば・・・野生種が洪積世に存在し、食用種が古代に移入されたのであろうか」と述べている。』と(那須 A1978: Nature Study, 24(12))記されていました。1 万年前をはるかに越えた昔の話になりますので、「あろうか」で結ばれているのだと思いますが、島倉氏の正確な花粉図鑑で学んできた身にとって、見逃せない情報だと思います。



2 有史以前の検出記録

人為と関連する遺跡からの検出例では、Tsukada et al.(1986sNature322:632-634 C)が、山口県(宇生賀湿原)のもので約 6,600 年前のソバ栽培の証拠を示した報告です。次いで、高知平野の鬼界アカホヤ火山灰の降下層準の下位からも花粉が検出されており、6,300 年前以前の栽培の可能性が示されています。山中他(日生態会誌、42:21-30)。この他、西日本の複数地点の

出現記録から、縄文時代後期以降のソバ栽培は確実であると思います。関東地方では(群馬県：約1,400年前)と(千葉県：約4,000年前)からの2例です。最古の、西日本の焼畑と関連づけたソバ栽培を原始農耕としたのは、塚田氏他の業績です。この場合は、中国大陸から朝鮮半島経由の伝搬の可能性が考えられますが、この時代は最温暖期でもあり、対馬海峡を経由した可能性があります。

3 北方からの移入の可能性

アイヌ文化における花粉の検出例がありました。鎌倉時代から安土桃山時代に相当する擦文期の竪穴群の発掘調査から報告されています。(加藤晋平・擦文期の栽培植物について——とくにソバの問題——、北方科学調査報告、10,39-45, 1981)。この論文中に引用された「アムール川中流域のツングースの住居付近の菜園で、現地語でセースとされた植物」をソバと仮定した上で小規模な菜園経営が近世におけるアイヌ民族の農耕に類似していることを指摘した上で、「アムール河畔からバイカル湖に亘るシベリア地方をソバの原産地」とする考え方を紹介して北方からの移入を論じています。一方、ソ連邦時代の考古学的な資料で、ソバ栽培を示すものは12~14世紀のグリヤート族(ブリヤート族のことか?)の墓から、種子が発見されたこと以外にないことも示されており、有史以前の日本

の産出例につながるソバ栽培の伝搬経路はまだ、不明です。

4 花粉サイズについて、再度ソバの花粉を例にして

花粉の大きさは、化学的な処理の過程や、植物の成熟状態でも変わります。大学院時代に、ソバの花粉の大きさを問題にした時、より精度の高い顕微鏡で観察することになりました。その結果、小さくてもソバの花粉の特徴が確認できました。当時、サイズの幅は知られていたものの、近交弱勢を避けるための植物の進化に関わる重要な違いであることを知る研究者は少なかった。この些細な違いに向き合って、自分の観察結果を公表する。ただそれだけのことが科学的な態度であることを今更に思い返しています。

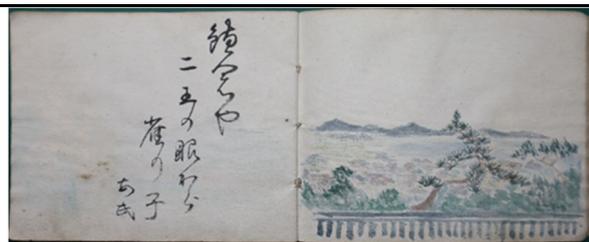
内山隆氏の講演「花粉と歴史ロマン」は、下のQRコードからご覧いただけます



中西月華逍遙(5)
月華の親友原安民(川崎安)二 齊藤功

月華の句集『やつさかご』序のつづき、「かうした原氏との交際によつて、大いに感化を受けて、文学、美術、宗教の教養を得て多趣味となつた。私が涙管を患つて東京大学眼科へ通つた時、其間に大磯へ案内され、シギ(鳴、引用者。以下、引用者の語句は略)立沢や、こよろ

ぎの浜をめぐり、江の島へ行き、鎌倉の円覚寺、建長寺へ回り半僧ボウへも一緒に登つた。この時に水彩画をすゝめられて、大磯の宮代屋の二階から伊藤博文公のソウ(蒼)浪閣、泡垂山の風景など描いた。鎌倉で長谷の観音を写生した。其画に氏は「鎌倉や仁王の眼から雀の子」の句をつけた。私が眼科に入院してゐる時、氏は鷗外の「歌日記」や「即興詩人」など送つてよこした。氏は大の漱石好きで明治卅八年の「ホトトギス」新年号に「我輩は猫である」第一回が出た時、これが本年文学作品中のケツ(傑)作になるのだと云つた。



大磯の宮代屋に滞在の折の作画
俳句：川崎安(原安民)、画：中西月華
中西月華画帳(明治三〇年1897、六月)より

氏は子弟教育にも力を尽くした。私の長男正雄も近くのオウ(鷗)外先生出入の建具屋の二階へ下宿させた。郷里神奈川郡中郡の学生達の為めに、相中義ジュク(塾)を作り、其舎の学生監督をした。開舎の祝に徳富蘇峰先生をまねいて講演会を開いた。其の当日私も招かれたので雨を衝いて草鞋はきで出京したのを私は今でも覚えてゐる。自分の学費も豊かならぬ時でも、

令和6年3月31日

弟や従兄弟達を促して出京させ、学校へ入れた。そして自分は小舟町艸山家の家庭教師をしたり、本郷佐藤家（順天堂）の入学試験の家庭教師をしたりした。私はこの時代、少ガク（額）ではあったが、送金した時もあった。其後、私が謡を稽古した時の先生、佐藤福待氏は、其時原氏に教はつた一人であった。こんな風で人の世話好きであった。

金沢から来て美術学校に入学してゐたハン（藩）の貸費生、毛々又市が肺結核で悩んでゐた時氏は世話して、北里博士の伝セン（染）病研究所に交渉して、無料で入院させてやつた。そして一週間置きに尋ねて其洗濯物をとじてやつた。この時、私にも同行をすゝめられて、一二度尋ねた事を覚えてゐる。毛々は日本画をよく描いた。亡くなってから友人達から寄附金を集めて石碑を建て、其残金を国元の親へ返してやつたそうだ。これも氏が学生時代の頃だと思ふ。」（つづく）

数年ぶりの研修懇親旅行を実施

成田宗吾霊堂と佐倉市立美術館

齊藤 功

去る九月十六日（土）、数年ぶりに研修懇親旅行を実施しました。当日はまだ秋の暑さが残る日でしたが、十九名の参加者は、宗吾霊堂・佐倉市立美術館を見学。帰りは道の駅「風和里しばやま」で買い物をして無事帰宅しました。旅



宗吾霊堂大本堂の前で記念写真

行実行委員の内山いつ顧問、加藤隆雄副会長、伊東邦子会計、安達和夫、皆さんの入念な計画と準備、そして当日の内山いつ・伊東邦子さん両氏の至れり尽くせりのお世話のお陰で十分楽しめました。宗吾霊堂の宗吾御一代記館では人形六十六体十三場面を案内の女性の説明を聞きながら勉強致しました。見学後霊堂向かいの甚兵衛そば屋にて秋の暑さにはもってこいのざる蕎麦を堪能しました。

佐倉市立美術館では企画展画家 junaidan の作品原画展「IMAJINARUMU」を鑑賞しました。

義民・佐倉宗吾郎の生涯に思う 内山いつ

宗吾郎は堀田領内、佐倉城下に住んでおり、本名を木内惣吾郎と言いました。

慶長十七（一六一二）年下総国印旛郡公津村に生れました。寛永より承応年間の頃、佐倉藩国家老による暴政と極度の重税が行われ、領民たちの苦しみは一通りでなく、他国他領に逃れる者数知れず、路上に餓死する者も現れて、文字通り地獄の日々に至り、百姓一揆が起こりました。今から三百七十年あまり前の頃でした。

宗吾郎はこの状況を見るに忍びず、各名主と相談し、三百八十九ヶ村を代表し、佐倉代官屋敷、あるいは佐倉藩重役に減税をお願いしても取り上げられず、江戸に上り領主、堀田正信公上屋敷の門前でもお願いしても、願書は却下となつてしまいました。

万策尽きた宗吾郎は最後の手段として、將軍家への直訴を決意いたしました。妻子に罪が及んでは不憫であると、承応元年十二月十日、大雪を幸いに江戸表を離れ、我が家をめざして帰って参りました。しかしながら印旛沼の渡し船は鎖でつながれ、宗吾郎への詮議は嚴重をきわめております。

この時、渡し守の甚兵衛は命をかけて鎖を断ち切り、宗吾郎を妻子の許へ送り届けました。そして、甚兵衛は印旛沼に身を投げて、自ら命

令和6年3月31日

を閉じたのでございます。

無事妻子に別れを告げる宗吾郎は、「なあ、おきん、どうかこれを納めてくれ！四人の子供にや勘当、女房のお前にゃ離縁状、これだけあれば妻でもなければ子でもない、あかの他人の立派な証拠、どうかこの世の縁を切ってくれ！」

頼む夫に妻のきん、受け取れませぬと首を振り、子供たちは「父（とと）さま、父さまと別れを惜しみ、泣き叫ぶ妻子に背を向けて、生きて再び帰ることのない直訴の旅に赴く宗吾郎に雪は容赦なく降りそそぎ、その姿は雪のなかに消えて行きました。

「おきん！さらばじゃ。いとし子たちを頼みましたぞ！めざすは江戸じゃ。はかない縁をうらむなよ！」

時は承応元年十二月二十日、上野東叡山寛永寺へ御参拝の四代將軍家綱公に直訴を執行、「おそれながらの差し出す命捨て身の直訴状。民の心知らずしてどこにおかみの道があろう！」

幸いにも後見役、保科正之公が願書お取り上げ下さいましたので、ここで佐倉領民はようやくにして苦しみから救われましたが、直訴の罪により宗吾郎ははりつけ、四人のお子様は打ち首に処せられました。

「男宗吾は公津ヶ原のつゆと消えても恨まぬが、なぜに吾が子もあの世まで…父を許してくれよ」と涙にむせぶ宗吾郎でございました。

義民宗吾郎の命がけで守ってくれた、三百八十九ヶ村、三百七十年あまり過ぎた今日でも、人々は宗吾様親子に対してお線香の煙が絶えぬ感謝の日々でございます。

以上宗吾様（本名木内惣吾郎）の生涯でございましたが、直訴の罪は重く田畑財産を没収されました。

その後、文化三（一八〇四）年には堀田正時公が、惣吾郎さまの子孫に「田高五石」を供養田として与えました（七反分）。

なお、惣吾郎が住んでいた家は、嫁いだ娘さんが実家に戻り、現在十七代目にあたる子孫が住んでいるそうです。

また、境内には惣吾様の御生涯を六十六体の等身大の人形、十三場面に再現した日本有数の大パノラマ式の宗吾様一代記館等の建造物があります。

そして、妻きんは仏門に入り、夫やわが子の霊をともらう人生を送り、五十余年の生涯を生きました。心静かな日々を送ったことでございます。

令和五年九月十六日
歴史散歩 北総方面の旅より



少年高齢化社会を生きる

染谷佳子

「年を取るとは、こういう事だったのね」と昔の仲良しの友人との会話である。若かりし頃の楽しかった日々、青春時代は、登山、スキー、ダンスと足は自慢であり、仕事も真面目に働いたが、良く遊び学んだものだ。その足も今は歩く事さえヨタヨタというか、ヨボヨボの老婆となってしまうた。がしかし、私は高齢化社会という言葉に、高齢者は遠慮がちになりながら、お世話になり、次世代が、どうなるのかを心配してしまふ。

九十九里が「海浜文化都市」として輝いていた頃、九十九里に転居して九十九里の海を眺め、美しい夕焼けに感動しながら、歴史文化を学ばせて頂いた。老いを識らない伊能忠敬を生んだ町、多くの文人墨客の訪れた町、何と云っても大漁で豊かだった漁業の町、そして、戦後、米軍の基地となった悲しい歴史の町（今、サンライズとなりお客が多い）。

又眞忠組事件の中心地でもあった歴史を訪ね歩き学んだ日々がなつかしい。前郷土研究会に夫と入会したのは平成四年の事である。木島先生と田村先生が「いわし博物館」に居られ、町

令和6年3月31日

誌三巻を購入し、私が質問した事は「芝虫って何ですか？」と訪ねたのがきっかけで、郷土研究会にご縁が出来た。私も夫も「全国歴史研究会」(新人物往来社)に入っていたので、やがて会が消えてしまっても困らなかつた。やがて、平成二十二年に、新郷土研が立ち上がる時、私も発起人のひとりであった。川島先生、齊藤先生、内山いつさん、村松さんと私でサンライズに集まり相談したのは平成二十一年の事であった。平成二十二年発会以来、いろいろ学ばせて頂いた。平成二十九年九月六日に、北総史跡めぐりの三里塚での帰路、人によつかり転倒して、右肩の脱臼骨折し入院、手術、転院、リハビリと一年余り郷土研は休ませて頂き、役員も退任させて頂いた。右手なので、車の免許の返納はドクターの指示に従った。歴史好きの私は、受傷後も郷土研に出席し、研究発表も会員では、一番多くさせて頂いた事は感謝です。

川とか小倉とかは何かの節に学んだ事もあったが。中世の武士団が破れてこの地に土着した方たちで、佐瀬城に居た佐瀬さんの事は東金二の袋に落ちのび、やがて柳沢吉保を産んだ「き」さんの家である。

話はさておき、少子高齢化の時代、これからの郷土研のあり方も考える時代かもしれないと思う此頃である。

つなぎ来しいわし文化や睦月潮 佳子句

人生をふりかえって 内山いつ

私は昭和一二(一九三七)年六月十八日に、父政次、母まつの長女として誕生しました。この年の七月七日に支那事変が始まり。世の中は急速に戦時下へと進んでいきました。

父は、生後三か月の乳飲み子をのこし、出征していきましました。高校通学用の自転車を購入するためタバコを止め、貯金箱に貯金を始めました。

父は、昭和十五年頃と思いますが、戦地より帰り、南今泉の終点まで迎えに行きました。三歳の頃の私は、約四キロの道を、晴れ着を装って、父に会いたい一心で歩いたので、周囲の人に驚かれたことを覚えています。

昭和十八年の秋、母は切符性で買い求め七五三の晴れ着を用意し、東金の山本写真館で撮った写真を父に送ったそうですが、従兄弟の実と

美恵子は戦争で亡くなってしまいました。母に抱かれているのは一歳くらいの妹で、人見知りで大泣きされて困ったのを覚えています。



昭和十九年四月、豊海国民学校へ入学、土手を防風頭巾をかぶって登校しました。翌年の二十年頃は、近くの神社に分散授業となりました。母は知人より畑を借りて野菜を作り、保存食としてさつま芋の乾燥芋や、切り干しなどを一升樽に詰めこみ、近所の老人とお茶を楽しむ日々でした。

特に忘れられぬ思い出の記憶にある、真亀下地区に住む通称「すつつあん」という老人は、畑の中にあばらやで一人暮らしていました。畑で作物を育て売りに来る、それが唯一の収入源です。母は、自分の家にある品物でも買ってやり、帰りにはお茶を入れて接待していました。

一歳くらいの妹は、見知らぬ人のため、帰るまで大泣きしていました。

妹は人見知りする性格で、人の前に出ることが大の苦手でしたが、その妹が大人になり、商人の道を歩んでいる運命は妙なものです。

幼児期の体験で「すつつあん、よそべくらすさん、その妻久子さん、みやさん」など、親しみを持って人々に愛情をこめて付き合っていた母の人生が、その後の私の人生に大きく影響したように感じています。

昭和二十二年、戦地の父は南の島で戦死の訃報が届き、小学四年生で父の野辺送りをし、その日から母と二人三脚で生きる人生となりました。

昭和二十八年三月、高校進学をあきらめ、千葉市へ住込みで就職して、二千五百円の月給から二千円を実家に送金しました。自分で決めたはずなのに淋しさがつのり、中学時代の恩師の教え「人は師なり」を思い出し、地域の組織（青年会）に入会し、それから六十年が過ぎました。

青年会、青少年相談員、PTA、婦人会、福祉団体などを経て、八十七歳の高齢になりました。人生終盤の日々を生きる亡母は百一歳の人生を閉じましたが、いつの間にか母の生涯と同じ道を歩んでいる自分に気づいている昨今です。

（令和六年二月十七日例会の講話より）

内山いつ氏の例会での講話ビデオは、下のQRコードからご覧いただけます



戦中及び戦後の回顧

浅岡弘美

私が戦争で神田の家を焼かれたのは、小学校一年生の二月二十六日でした。それから三回疎開をしました。

神田の空襲ではビルの中に毛布をかぶって避難したのですが、ものすごい音がして、母親が私の上にはばっと被さってくれたのを覚えています。雪と一緒にチラチラと火のついた黒いものがいっぱい落ちてきました。

その後、川崎の親戚を頼って着の身着のまま逃げ、さらに一ヶ月もしないうちに学童疎開で、埼玉の大きなお寺へ行きました。食べるものも着るものも少なく、お茶碗に一杯のご飯をよく噛んで時間をかけて食べました。シラミにも悩まされました。皆ポリポリ掻いていて、日向ぼっこしながらみんなでしらみ取りをしました。女の子も上の一櫛だけ残す程度で刈り上げて、男か女かわからないような格好でした。

また、一緒に疎開していた生徒の両親が戦死したことを、一人残されてしまった生徒に伝えようかどうしようかと相談する先生と寮母さんの会話を聞いてしまったこともあります。

三ヶ月ほどした頃、私の両親が面会に来てく

れ、坊主頭で痩せているのを見て、どうせ自分たちも戦争で死ぬのなら一緒に東京へ帰ろうということで、その日に連れて帰ってくれました。

神田は焼け野原でしたが、小川町に焼け残った一角があり、そこを借りました。何しろ家がない人たちがばかりですから、一軒のうちに四世帯ぐらい住んでいました。

その頃、九十九里から担ぎ屋さんがいろいろなものを持って売りに来てくれ、「九十九里は良いところだからこっちに来れば」と世話してくれました。それで母と二人で九十九里の下貝塚に家を借りて住むことにしました。

小学校へ通う年でしたが、籍も焼かれ手続きもできず、本も何もないため少しの間ですが学校へも通えませんでした。

母は世話してくれた担ぎ屋さんと一緒に仕事に出掛け、私一人残されましたが、齊藤会長のおばあちゃんや周りの方々には本当に自分の子供のように可愛がってもらいました。一年ほど片貝に移り片貝小学校にも通いましたが、その後不動堂に移り豊海小学校に転校しました。

九十九里に艦砲射撃があると聞いて、貝塚の裏側の神社に、穴だけ掘ったむき出しの防空壕に隠れました。それが終戦の昭和二十年八月でした。もう少し終戦が遅れたら九十九里は全滅して、沖繩みたいになっていましたね。良いときに終戦になってくれたと思います。

父は東京にずっといたのですが、母が進駐軍の人たちのラーメン屋さんを始めたのです。夜のラーメンをやっていたことがあって環境が良くないからと、私は不動産にずっといて高校に通いました。

戦後、進駐軍のキャンプに連れて行ってもらいました。すごいテントの中に映画館みたいなものがあった、今で言うバナナシエイクが甘くて美味しいものがあるのだなっていうことを覚えております。それで高校卒業して、一旦東京に帰ったのです。

東京に家があるので、二年ほど行っておりましたが、二十歳でこちらに帰り、それ以来六十年以上も皆さんに大変お世話になりました。いろいろなことをやらせていただきました。恩返しができるかなと思ったのですが、助けてくださった皆さんはあの世に逝ってしまいました。けれども、その後にいる方々と仲良くできればいいなと思いますし、これからも何かお役に立てることがあればと思っております。

今後ともよろしく願っています。

(令和六年二月十七日例会の講話より)

浅岡弘美氏の例会での講話ビデオは、下のQRコードからご覧いただけます



九十九里町に魅せられて

安達和夫

私は、昭和二十六年に千葉市登戸町で生まれました。当時の登戸町は東京湾に面した町で、私の家から道を一本挟んだ先には海が広がっていました。砂浜では採れたばかりの海苔を干す筈が並べられ、私も祖父たちに交じって、海苔貼りを手伝ったものです。

今でははるか沖まで埋め立てられ、全く別世界になってしまいました。小学校に上がるまで過ごした登戸の海は、私の原風景と言えます。友人に誘われ九十九里の海を初めて見た時、遠い昔の懐かしい景色に再び出会えたような感動を覚えました。ぜひここを第二の住処にしたいと強く思い、一念発起して粟生に古民家を購入した次第です。

粟生に居を構えて十年にも満たない新参者ですが、昨年より九十九里郷土研究会に加えさせていただいたのを機に、皆様方との交流の場を増やすことができたかと願っております。

九十九里は自然や食材が豊かな土地ですが、住むうえでいくつもの課題も感じております。今後、そうした課題の解決に向けて微力ながらお役に立てればと願っております。どうぞよろしく願っています。

(令和六年二月十七日例会より)

町の大イベント「町民文化祭」に参加して

加藤隆雄

新型コロナウイルス感染予防で中止されていた「町民文化祭」が五年ぶりに十月二十九日（十一月三日の期間に開催され、当会も積極的に参加しました。今回は中央公民館二階研修室の全室が展示会場となり、例年よりも広く、まったく様相が変わりました。

展示物は、いわし博物館に収蔵されていた町の建物や漁業や生活の状況などの写真パネル、昭和五〇年代頃の市街地図、伊能忠敬宛て大地曳網主飯高惣兵衛の忠敬を諫める書簡（複写）、『九十九里町誌』総説編・各論編など。また、今年度の総会記念講演の「花粉と歴史ロマン」の冊子の配布。また、当会会員がデジタル化した『九十九里町誌』も出品しました。

午前と午後の部に分けて当番制にし、各二人で来場者に展示物や歴史の説明とアンケートのお願いをしました（回答数：十九件）

郷土研究会の展示については、80%の方が「大変良かった」「良かった」と評価していただき、次のような感想も寄せられました。

・地域の古い写真や地図、いわし博物館の資料や貴重な資料が展示され、町の昔の様子を知ることができた。

・『九十九里町誌』のデジタル化により、パソコン

で閲覧できる

・解りやすい説明など例年と比較して展示の状態が
とても良かった

・来場者が少ない。役場からの案内の工夫が必要。

もつと積極的に町民に呼びかけなくてはいけない

・町の歴史が蓄積されていくような取り組みが必要

・全国的に有名な町なのに、役場の取り組みが貧弱

すぎる

・写真や展示品の説明が欲しい。そうすれば町の歴史が解るし、思い出もよみがえって来る

令和五年度活動のあしあと

加藤隆雄

【第一回】 四月一五日(土) 町中央公民館

役員会 総会準備

【第二回】 五月二〇日(土) 町中央公民館

総会及び記念講演「花粉と歴史ロマン」

千葉経済大学名誉教授 内山隆氏

犬吠埼灯台付近の高神低地と称される水田地帯

の深さ二〇メートルの堆積物の花粉群を分析。

約一万年間の森変遷と歴史ロマンの講演

【第三回】 六月一七日(土) 町中央公民館

例会 講演会「仏像の見方2 六世紀 天皇は

仏像に魅力を感じ仏教を受け入れた」

東金市文化財審議会委員 田井中善夫氏

仏教図像の世界、大曼荼羅の図像学など仏教受

け入れ時の解説

【第四回】 七月一五日(土) 於妙覚寺三治郎文庫

役員会 文化祭のテーマと展示物について協議

【第五回】 九月一六日(土) 文学・歴史散歩

「宗吾霊堂と佐倉市立美術館を巡る旅」

参加者一九名。

役場・ふわり芝山・宗吾霊堂・昼食・甚兵衛蕎麦・絵

本アート鑑賞・佐倉市立美術館・ふわり芝山・役場

【第六回】 十月二日(土) 町中央公民館

例会 古文書講座「九十九里の歌」

本会顧問 川島秀臣氏

伊藤左千夫、三橋隆臣、若山牧水、香取秀真、

寒川鼠骨の歌を紹介。

【町民文化祭】 十月二七日～十一月四日

町中央公民館 二階研修室

十月二七日～二八日に展示物搬入・展示

二九日～十一月三日の六日間午前・午後に分か

れて会員二名で当会展示会場の来場者に対応。

来場者にアンケートを依頼

十一月四日、展示物の片付け、搬出。

【第七回】 十一月一八日(土) 妙覚寺三治郎文庫

当会展示会場来場者のアンケート結果を発表

および今後の文化祭の対応等について協議

【第八回】 一月二〇日(土) 昼食懇話会

大網白里市居酒屋「はせ川」

参加者一六名、能登半島地震の犠牲者に黙祷後、

新年を迎えて話題に花が咲き、にぎにぎしい新

年会でした。

【第九回】 二月十七日(土) 妙覚寺

例会 会員発表

「人生をふりかえって」内山いつ氏

「戦中及び戦後の回顧」浅岡弘美氏

「町の今後に向けた提案」安達和夫氏

【第十回】 三月十六日(土) 町中央公民館

役員会 来年度の総会準備及び役員改選

令和六年度総会記念講演 五月十八日(土)

九十九里町中央公民館三階講義室(予定)

来る五月十八日(土) 開催予定の郷土研究の
総会記念講演は、小倉幸子氏が主宰されている
「黒潮太鼓」を予定しております。

九十九里に古くから伝わる黒潮太鼓の今日ま
での成り立ちに加え、小中学生による演技をご
覧いただく予定にしております。

編集後記

郷土研通信第十四号をお届けします。今号は、昨年
号と合わせて八ページの構成と致しました。

会員の皆様方から素晴らしい原稿の数々を託して頂
いたことで、新参者ながら何とか大任を果たすことが
できました。

私事で恐縮ですが、この会は歴史に留まらず、郷土
の将来も含め共に研究する会だと齊藤会長からお聞き
し、素晴らしい活動をなさっておられると感銘を受け
ました。微力ですが、今後とも郷土研究会を通して町
の発展に尽くさせて頂けたらと存じます。(安達)